

# 【【主題】 自ら学びに向かい、学び合うアウトプットを支える仕組みづくり

## 【副題】 ～「学びと育ちの主人公」の育成と「学び・語り合える同僚性」の構築を通して～

【学校・団体名】 兵庫県姫路市立琴陵中学校  
【役職名・氏名】 校長 山中 和興

### 1 はじめに

「今日の授業みたいに、みんなで交流する時間をもっと増やしてほしいです」授業のあとに生徒が笑顔で発したその一言に、自ら学びに向かう志を感じた。

令和の日本型学校教育において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が求められており、生徒が主体的に学びに向かい、他者と対話を重ねながら深く学び続ける力の育成が急務となっている。兵庫県では「主体的・対話的で深い学び」を推進し、「目標を明確化し、協働的な学びを設定する」ことを重視している。

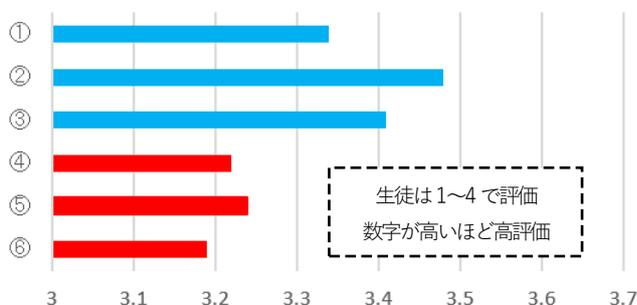
姫路市でも、3年間の研究構想として、アウトプットをキーワードとして授業づくりに取り組んできた。本研究では、それらの視点を軸に、生徒自身が「学びと育ちの主人公」として自ら学びに向かうために、教職員が「学び・語り合える同僚性」を構築して取り組んだ3年間の実践である。



### 2 生徒の実態

令和4年度7月（1学期終了後）、生徒が授業にどのような意識で臨んでいるか学習アンケートを行った。

- ① 学習のめあて（課題）を意識して学ぶことができた
- ② 自分の考えをもつことや、学ぶことが面白い
- ③ 仲間と意見を伝え合ったり、話し合ったりする機会があった
- ④ 仲間との対話を通して、自分の考えが広がったり、深まったりした
- ⑤ 既習内容をいかしながら学習できた
- ⑥ 授業の終わりに、次時にもっと知りたいことや学びたいことを考えることができた



学習アンケート結果を分析すると、「①学習のめあて（課題）を意識して学ぶことができた」と実感している生徒は多いが、「⑥次にもっと知りたいことや学びたいことを考えることができた」の数値が低い。この結果から、学習が本時だけで完結しており、「もっと知りたい」「次につなげたい」という思考が育っておらず、学びの連続性や広がり弱いことが考えられる。

また、「③仲間と意見を伝え合ったり、話し合ったりする機会があった」と実感している生徒は多いが、「④仲間との対話を通して、自分の考えが広がったり、深まったりした」の数値が低い。この結果から、対話の目的や意味の自覚が弱く、内面的変化を自覚・言語化する力が未発達であることや、形式的な意見交換はできているが、内容に深まりがないことが考えられる。

### 3 主題の設定

以上のような実態を改善し、願う姿に迫るために次のように研究主題、仮説、内容を設定した。

#### <研究主題>

自ら学びに向かい、学び合うアウトプットを支える仕組みづくり～「学びと育ちの主人公」の育成と「学び・語り合える同僚性」の構築を通して～

#### <研究仮説>

生徒が「学びと育ちの主人公」として、主体的に学び、対話を通して考えを深める授業を継続的に行うことで、学習への見通しや目的意識が高まり、仲間の意見と関わらせながらアウトプットする力が育まれる。また、教師同士が学びを語り合いながら授業を改善する「同僚性」が構築されることで、授業の質が高まり、生徒の学びの質的変容が促進される。



必要となる学びの土台が強化される。他教科でも「参観した学級の～を自分たちの学級でもやってみよう」という動きが生まれやすく、学校全体の学びの文化づくりにも繋がる。

⑤ 教員にも刺激・発見がある

生徒の視点からのフィードバックが入ることで、教員自身も「授業はどう見られているか」「何が伝わったか」と省察するきっかけになり、教職員間の学び合いにも好影響を与える。

以上のように、生徒自身が「授業は自分たちでつくるもの」という意識をもち、他者の学びを自らの学級改善に活かそうとする姿が見られた。学びを生徒にも開かれたものとしたことで、「自分たちの学級で授業を公開したい」という生徒の言葉も聞かれるなど、授業を自分ごと化する仕組みとして大きな手応えを感じた。

＜研究内容3＞対話を通じて自他の考えを吟味し、共に学び合い、意見を再構築するための土台づくり

① 学び合える学習目標設定

1/1~6/28の学習目標  
**学習姿勢の定着**  
① 全員で行う3分前・1分前学習  
② 小気味よい挨拶や返事  
③ ひびき学習  
④ 全員に聞こえる大きな声で発言する  
⑤ ノートを見たままではなく、聞き手を見て話す  
⑥ 全員挙手（ここでは！という場面で）

10/12~11/23の学習目標  
**聞き方・話し方に気をつけて授業に臨むレベル4**  
聞き方…互いの立場や考えを尊重しながら、結論を導くために考えをまとめながら聞く。  
話し方…仲間の考えを踏まえた上で再構築した意見を述べる。  
はじめは〇〇と考えていたのですが、△さんの意見を踏まえて考えると…！△さんの意見と自分の意見を合わせて考えよう！など

1/6~2/21の学習目標  
**今までやってきた聞き方・話し方に気をつけて全員で授業をつくる**  
聞き方  
・つなずき、つぶやきながら、自分の考えと聞き比べて即時反応  
・疑問点や相違点は何か、話している主張は何か  
話し方  
・結論→根拠の順で、相手の反応を確かめながら  
・学びの深まりが分かるまぐさを使って  
・仲間の意見を踏まえ、再構築した考えを述べる

話し方・聞き方セルフチェックシート

（聞き方）「互いの立場や考えを尊重しながら、議論を導くために考えをまとめながら」

（話し方）「仲間の意見を踏まえたうえで、発言を吟味し、再構築した意見を述べる」など

一年間の学校行事予定をもとに、学び方のレベルを8タームに分け、各タームで特に意識する学び方を生徒の意見を参考に段階的に計画させた。チェックシートをもとにタームが終わるタイミングで個人振り返りを行い、次タームに繋げることができた。

生徒同士が対話的に深く学び合うためには、まず安心して話し、互いの考えを大切にできる土台づくりが必要であるという「話す」「聞く」の学習規律に重点を置くという意見が多く上がった。聞く側には、傾きながら話を聞いたり、体の向きを発表者に向けたりすることで、話し手が安心して話せる雰囲気をつくることができる。また、話す側にも工夫を促し、教師に向か

って話すのではなく、教室全体を見渡せる場所に移動し、生徒全員に届く声量で話すことを大切にしたい。聞く側には、声が聞こえない場合は「もう一度言ってください」と丁寧に伝えることで、発表者の意見を大切にすることを育ててきた。こうした積み重ねによって、学級、学年全体に「互いの意見を尊重し合う」風土が生まれ、考えの練り合いや再構築といった対話的な深まりを支える基盤が築かれた。



③ 広がり、深まりを実感するための枕詞の活用

帰りの会の目標決めなど、議論をする際の話し方（例）～吟味し、意見を再構築する話し合い～  
※ 仲間の意見を聴くときは「自分の意見と比べながら」聴くことが大切です。  
そして、聴き比べて感じたことも必ず自分の発言に結び込みます。

**これまで発言した仲間の意見に枕詞をつけてみよう**

自分自身(〇)1人目までの意見を踏まえて自分の意見を述べる。要領は「同じ」ハンドサイン(3)に従うように。  
「仲間の意見を踏まえて自分の意見が伝わった」状態  
「仲間の意見を聞いても納得できなかった」時「自分の意見を再構築」した状態が使える状態。(対話的でいい学び)

【交流(発表)場面】互いの話し方を留意して見てね。  
● 仲間の発言と自分の発言はつながるよ！  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんの意見は自分と比べて、△△さんが納得できて私は…」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」

【話し合いの話し方】  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」

【話し合いの話し方】  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」

【話し合いの話し方】  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」  
● 「〇〇さんと△△さんの意見を比べてみてね。」

意見を述べる際、どのような枕詞があれば、議論や意見の深まりが実感できるかを生徒間で考えさせ、精査したシートを用いて、短学活での班活動から話し方、聴き比べ方を意識して取り組み、自分の考えの変容や他者の意見の影響を言語化する力の育成に努めた。このような言語活動の積み重ねにより、対話を通じて学びを再構築し、深めていく姿が多く見られるようになった。以下は、生徒が作成した交流場面での枕詞(例)「〇〇さんと△△さんの意見を合わせて考えると～」 「〇〇さんの発表を聞いて分かってきたのですが～」 「はじめは～と考えていたのですが〇〇さんの意見を聞いて考えが変わってきました。理由は～」 「〇〇さんの意見を聞いて確かにそう思ったのですが、自分の考えを変えることはできません。なぜなら～」 「今までの5人の意見は違うように感じるのですが、～という点では共通していると思います」 「自分で考えても全く意見が持てませんでした、〇〇さんの意見を聞いて～なことが分かりました」

③ 立場を示し、練り合うためのハンドサインの導入



対話的な学びを深めるために、生徒同士が自他の考えを吟味し合う仕組みの一環として、挙手の際に多様なハンドサインを導入した。学びが広がったり、深まったりするために必要な意思表示を生徒に考えさせ、挙手・発言する際に積極的に使用させた。

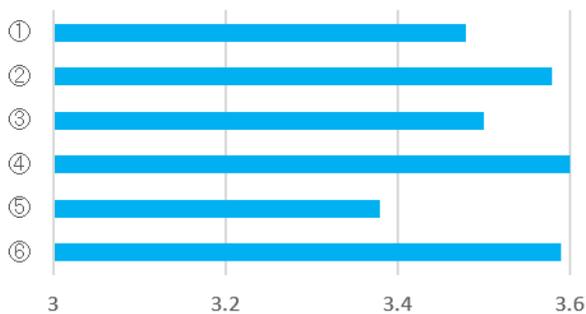
例えば、グーは反対意見、チョキは付け足しの意見、1は質問、キツネは変化(意見が変わってきた)など、発言の分類を可視化することで、教師も学習過程に応じて意図的指名ができるようになり、生徒も他者の考えとの違いや共通点を意識できるようになった。



【聞く・話すの学び方、枕詞とハンドサインの積極的な使用により自分の立場を主張できる生徒が増えた】

5 成果と課題

令和6年度3月、前回と同じ項目で学習アンケートを行い、以下のような結果となった。



項目	R4年度	R6年度	比較
①	3.34	3.48	+0.14
②	3.48	3.58	+0.10
③	3.41	3.50	+0.09
④	3.22	3.60	+0.38
⑤	3.24	3.38	+0.14
⑥	3.19	3.59	+0.40

(1) 成果

「友達と話してたら自分の考えも変わることもあるんやなって思った」「今日の授業のまとめは、みんなの意見がたくさん混じり合ったから書けた」研究を進めて1年半が経った2年生の後期、自分の内面の変化を語る言葉が増えてきた。本校では3年間にわたり、「自ら学びに向かい、学び合うアウトプットを支える仕組みづくり」を主題として、取組を進めてきた。特に、「④仲間との対話を通して、自分の考えが広がったり、深まったりした」「⑥授業の終わりに、次時にもっと知りたいことや学びたいことを考えることができた」の各項目に大きな改善が見られ、学びの必然性を感じさせながら、仲間と学び合う姿が高まったといえる。

また、多くの公開授業や検討会を通して「学び・語り合える同僚性」が構築できたことで、学校全体で授業を見直し、共有する文化ができた。

(2) 展望

本校ではICTの利活用も進んでいるが、従来のアナログの良さも大切に3年間にできた。表情から汲み取ったり、心地よさや緊張感を味わいながら対話で学び合ったりする取組を継続する一方で、ICTの利活用もさらに組み込みながら研究を進めたい。

6 おわりに

令和7年度、姫路市では「ワクワクする授業」がキーワードとして示された。本校では、爽やかな挨拶や床に一心に向き合う清掃活動など、誇れる学校文化が多い。しかし、学校の一番の特色ある文化は「授業」でありたい。生徒が学びと育ちの主人公として、ワクワクしながら学びに向かう姿を生み出すために、私たち教職員も日々研鑽に励み、生徒を凌駕するワクワクで授業に向き合いたい。



【参考文献】

- ・ 文部科学省 中央教育審議会答申
- ・ 令和7年度 姫路市教育委員会リーフレット